＜前回：教会建築のコスモロジー＞

（１）聖なるものの空間性

１．エリーデの宗教研究：聖なるものが顕現するという現象（＝ヒエロファニー）についての古典的研究。

２．ヒエロファーの実例。山、樹、柱、塔などによってイメージされる（→　世界軸）。

３．ヒエロファニーには、次のような構造が伴っている。

(1) 世界の三層構造（三層構造世界観）

(2) 世界軸の周辺におけるコスモスの生成（カオスからコスモスへ）

４．三層構造世界観：「天－地上－地下」　→　伝統社会のコスモロジー

５．世界創世神話：原初のカオスと、神の英雄的偉大な行為によるコスモスの創設。

（２）教会建築のコスモロジー

11．教会建築の歴史と様式

様式の変化には建築技術の進展の影響もあるが、基本的なことは、世界観（意味空間としてのコスモスの把握の仕方）の変化である。

12．建築の存在様態（森田）

物質的：物体性・合理性・技術性・構造性　→　強さ
事物的：功利性・合目的性・効用性・実用性　→　用
現象的：芸術性　→　美
超越的：超越性・神秘性　→　聖

13．ティリッヒの「建築の神学」：建築の機能と意味

・建築は、意味空間の構成に関わる。

・意味世界：形式（システムを構成する要素の相互連関）と内実（システムの意味根拠。根本的な現実把握・直観）

・形式と内実の関係は、歴史によって規定されている。関係を類型化するとき、それは様式として捉えられる。

・ティリッヒ「造形芸術における宗教的様式と宗教的題材」（『著作集　第七巻』白水社）

「内実が支配する様式と形式が支配する様式とは共に、様式としては内実の表現なのである。」　↓

19 世紀の近代市民社会：印象派／ 20 世紀の近代への反抗：表現主義

14．教会建築のコスモロジー

・バシリカ形式と集中式

・聖と俗とその境界、方向、上昇・下降、身体性、

15．ジャック・ル＝ゴフ『ヨーロッパは中世に誕生したのか？』藤原書店。

「カロリング朝ルネサンス」

16．スコラ的文化総合とゴシック

・アーウィン・パノフスキー『ゴシック建築とスコラ学』（ちくま学芸文庫）

「ゴッシク建築とスコラ学間には、時間と場所という純粋に事実の領域において、とても偶然とは思えない同時発生が存在している。」

「視覚芸術は空間の正確で体系的な分割を通して分節されるようになり、その結果、再現芸術においては物語の脈絡の、そして建築では機能的脈絡の、「明瞭化のための明瞭化」を生み出すに至った。」

「盛期スコラ学の〈大全〉と同様に、盛期ゴシックの大聖堂は何よりも「全体性」を目指

し、それゆえ、削除と綜合によって一つの完全で最終的な解決に近づいていった。」
17. ティリッヒ「芸術と建築」(『芸術と建築について』教文館)

７． 宗教改革と国民国家・国民文学

＜時代／年表＞

1517 年（10 月 31 日）：ルターの 95 ヵ条の提題、宗教改革の発端。
1524-25 年：農民戦争
　宗教戦争：1529 年・第一次カッペル戦争（スイス）、1531 年・第二次カッペル戦争
　　1546-47 年・シュマルカルデン戦争（ドイツ）、
　　1562-98 年・ユグノー戦争（フランス）、1618-48 年・30 年戦争
1534 年：イエズス会創設、ヘンリー８世による国王至上法（首長令）
1545-63 年：トリエント公会議（教皇至上権、カトリック教義の確認）
1555 年：アウグスブルク宗教和議
　　（諸侯と諸都市にプロテスタント・カトリックの選択の自由を承認）
1618 年：プラハでプロテスタント蜂起→ 30 年戦争へ
　　1618-1643 年：30 年戦争（ボヘミア・プファルツ戦争）
　　1618 年、プロテスタントとカトリック、北ドイツで衝突
　　1624 年、対ハプスブルク同盟、イングランド、オランダ、フランス、
　　スウェーデン、デンマーク、反ハプスブルクで結束
　　1625-29 年、デンマーク・ニーダーザクセン戦争
　　1630-35 年：スウェーデン戦争（グスタフ・アドルフ）
　　1635-1648 年：フランス・スウェーデン戦争（リシュリュー介入）
　　1640 年、皇帝フェルディナント 3 世、和平交渉を開始
　　1648 年、ツスマルシャウゼンの戦い、フランス・スウェーデン連合軍、皇
　　帝・バイエルン連合軍に勝利。ランスの戦い、フランス軍、スペイン
　　軍を撃破。スウェーデン軍、プラハを包囲
1642 年：ピューリタン革命（1649 年からイギリス、共和制）
1648 年：ウェストファリア条約（ヴェストファーレン条約）締結
1648 年：オスマン軍ウィーン包囲
1652/65/72：英蘭戦争
1660 年：イギリス、王政復古
1664 年：ニューインドランドの特許状廃止、王領になる
1688 年：名誉革命
1740 年：「大覚醒」はじまる
1776 年：アメリカ「独立宣言」
1789 年：フランス革命開始
1792 年：フランス、第一共和政
1799 年：ブリュメール 18 日クーデター、統領政府樹立
1804 年：ナポレオン皇帝即位（第一帝政）
1806 年：神聖ローマ帝国消滅
1814 年：ナポレオン退位、ウィーン会議

（１）宗教改革とその意義

１．宗教改革の思想内容（三大スローガン）

宗教改革の思想内容については、改革者によって幅があり（例えば、聖餐論争）、簡単な要約は困難であるが、その共通項を宗教改革の三大スローガンと言うべきものに集約することは可能であろう。

①「信仰のみ」（信仰義認論）、②「聖書のみ」、③「万人司祭説」

２．アウグスブルクの宗教和議（1555 年）：帝国議会がルター派を容認。諸侯に、それぞれの領邦でカトリクとルター派のいずれを選ぶかの選択の権利が与えられる。

↓

カルヴァン派の信仰や、個人の信仰の自由は認められなかった。

３．再洗礼派（成人洗礼＝個人の信仰の自由を主張）の排除。

近世の限界。個人の自由、あるいは政治的な平等は、近代を待つ必要があった。

（２）宗教戦争から近代へ

４．宗教改革は西欧世界の近代への移行を促進した。

1)近代文化の成立を後押しする。近代的な自律性や人格性（人権）といった理念の成立基盤となる。

・宗教改革の精神 → 神の前における

→ 平等自立した個人と自由・平等（理念≠現実）

・西欧的な政治・経済・知のシステムとプロテスタンティズム（ピューリタン）の関係

近代議会制民主主義（リンゼイ・テーゼ）

近代資本主義・市場経済（ウェーバー・テーゼ）

近代科学（マートン・テーゼ）

2)混乱を通した近代的システムの成立

宗教戦争の悲惨さ（30 年戦争の主戦場となったドイツは、17 世紀に、人口が、1500 万人から 1200 万人へと減少）→政教分離、信教の自由、国家契約説。

（３）ウェストファリア条約と近代国家体制の成立

５．30 年戦争の講和条約（ミュンスター条約とオスナブリュック条約の総称）

近代国際法の出発点となる条約。ドイツを中心に 30 年間続いたカトリックとプロテスタントによる宗教戦争は終結。条約締結国は相互の領土を尊重し内政への干渉を控える。これによって、現在にいたる国家群によって構成される新たなヨーロッパ的秩序（その大枠）が形成された（＝ウェストファリア体制）。

６．中世からの広域的秩序（ハプスブルク家、神聖ローマ帝国→ 300 以上の領邦に）の解体・弱体化。

・フランス：アルザス地方と、ロレーヌ地方のメッツ、トゥール、ヴェルダンを獲得（神聖ローマ帝国からの離脱）。

・スウェーデン：賠償金 500 万ライヒスターラー、領土拡大。

・スイス、オランダ（ネーデルラント連邦共和国）：独立を承認された（神聖ローマ帝国からの離脱）。

・ブランデンブルク選帝侯：ヒンターポンメルン公位（ポンメルン東半分）を獲得。

・アウクスブルクの和議の内容を再確認。カルヴァン派を新たに容認。
・神聖ローマ帝国内の領邦は主権と外交権が認められた
　　→　皇帝権力の制限（帝国議会の承認）。
・議会及び裁判所におけるカトリックとプロテスタントの同権が規定。
７．国民国家へ
国家内部の全住民・構成員を「国民」として統合することによって成り立つ国家。単一の民族がそのまま主権国家として成立する国家概念やそれを成り立たせるイデオロギーを伴う（一民族一国家　→　民族と国家との微妙な関係・緊張関係）。しかし外部には植民地体制。　→　国民の形成と国語　→　国民文学

（３）二つの近代のモデル――アメリカ独立戦争とフランス革命

８．賀川豊彦「社会革命と精神革命」（1947 年、『賀川豊彦全集　第４巻』キリスト新聞社）
「革命の恐ろしさは餓死者がおびただしく起こることと、革命の混乱性とである。多くの革命は、無数の餓死者が出来るばかりで、国は少しもよくならない。」「混乱を来したばかりで、何も得るところもなかった。」
９．ハンナ・アーレント（『革命について』ちくま学芸文庫）
・革命の意義＝自由（権力に加わる積極的自由。古代ギリシャのポリスにおける自由人たちの政治活動をモデルとする）の空間を創設することと目的としてそれに成功すること。
・フランス革命は流産したと言わざるを得ない、アメリカ革命は部分的とはいえそれに成功した。
「アメリカ革命を救った奇蹟は、入植者たちがイギリスを相手に戦争で勝つほど強力だったという点にあるのではなく、ジョン・ディッキンソンが正しく懸念していたように、この勝利が「夥しい数のコモンウェルスと犯罪と惨禍に」終り、ついには疲弊した諸州がある幸運な征服者の軛のもので奴隷状態のなかに沈む」という事態を迎えなかった点にある。実際、革命を伴わない反乱つまり普通いわれているような革命のたいていの運命はこのようなものなのである。しかし、反乱の目的は解放であるにたいして、革命の目的な自由の創設であるということ・・・」（223）
10．政教分離の二つの形。
　アメリカ／フランス

＜参考文献＞

１．Ａ．Ｅ．マクグラス『宗教改革の思想』教文館。
２．金子晴勇『宗教改革の精神』中公新書、『ルターの宗教思想』日本基督教団出版局。
３．今井晋『ルター』（人類の知的遺産）講談社。
４．久米あつみ『カルヴァン』（人類の知的遺産）講談社。
５．永本哲也ほか『旅する教会――再洗礼派と宗教改革』新教出版社。
６．阿部謹也『物語　ドイツの歴史――ドイツ的とは何か』中公新書。
７．テュヒレ、ル・ブラン、ブーマン『信仰分裂の時代』（キリスト教史５）、『バロック時代のキリスト教』（キリスト教史６）、平凡社ライブラリー。
８．大澤真幸『ナショナリズムの由来』講談社。
９．塩川伸明『民族とネイション――ナショナリズムという難問』岩波新書。